

● 事例 ●

初年次教育を基盤とした学士課程教育の構築 — 玉川大学における初年次・二年次教育の展開 —

菊池 重雄

(玉川大学教学部長・経営学部国際経営学科教授)

玉川大学では、学士課程教育の構築にあたりその基盤を全学必修科目である「一年次セミナー101/102」を中心としたFYE (The First-Year Experience) (図) に置いている。そのうえで、現在のところ選択科目として実施している「二年次セミナー201/202」に接続させ、最終的には、各学部で行われている三年生、四年生の専攻領域の学習と連携させる移行教育プログラムを開発、展開することを検討している。移行教育に重点を置くのは、大学教育の早い段階で高校生から大学生への転換を図り、学士課程そのものを、大学生から社会人への転換を図る四年間と考えるからにはほかならない。

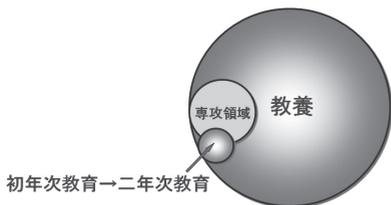
学士課程教育の基盤となる「一年次セミナー」の学習をとおして高校生から大学生への転換が進められることはいうまでもない。「一年次セミナー」をとおして学生たちは大学生活を送るといふことがどのようなことなのかを、学習面を中心に学んでいく。「一年次セミナー」を引き継ぐ「二年次セミナー」は、すでに学習の方法や、大学生としての生活のスタンスを身につけた学生たちが、それぞれの専攻領域をふまえて、大学における自らの立ち位置を確認し、卒業後のキャリアの方向性に思いをめぐらす科目である。一方、「二年次セミナー」は、専攻領域への導入を図る科目としての役割に止まるものではない。教養はあくまでも

高度な専門知識に裏付けられて身につくものであり、専門の学問は教養の一部に過ぎないとの立場から、「二年次セミナー」は、学生が教養の全体的な枠組みを理解し、世界における自らの役割や、専攻領域の学問的役割について考える科目としても機能するように設計されている。「二年次セミナー」は広い教養の世界に旅立つ学生の原点となる科目でもある。玉川大学では、卒業までに全学コア科目群から三四単位以上を履修することが学生に求められる。専攻領域と並行して、全学コアの諸科目を学ぶことで、学生はさまざまな学問分野にふれると同時に、それぞれの分野を自らの専攻領域の学問的・社会的役割と関連づけて理解する機会が与えられる。そうしたときの、学習のナビゲートを行うのが「一年次セミナー」をベースにした「二年次セミナー」である。

以下では、「一年次セミナー」と「二年次セミナー」の概要を述べることで、玉川大学の初年次教育と二年次教育について具体的に紹介する。なお、その際に、玉川大学が取組んでいるFD活動の一端を合わせて紹介したい。教員がそれぞれのセミナー、とりわけ「一年次セミナー」にかかわることで、その授業への取組みがミクロレベルのFDと連動し、教育改善の成果となって現れているからである。

*The First-Year Experience (FYE) 大学初年次の経験

大学における初年次の教育的経験を包括的に意味することは、「一年次セミナー」もこの経験のひとつ。初年次に学生が経験するさまざまな教育上の経験をさす。入学のための出願から入学前教育、入学後のガイダンス、履修登録、学業上のアドバイス、学習を中心とする学生生活全般など、学生が初年次に経験するすべてを対象とする。



〔図〕

一 玉川大学の初年次教育 ―「一年次セミナー101/102」を中心にして

(一) 転換教育としての初年次教育

玉川大学では、初年次教育の主眼を「中等教育から高等教育への転換教育」においている。それに基づき、全学体制で実施している初年次教育プログラムではミッション・ステートメントを次のように設定している。①大学生として学習する力をつけさせ、専門知識をもった教養ある社会人を育てる。②学生一人ひとりに早い時期にアイデンティティを確立させ、二一世紀社会で生きていくうえの基盤を形成させる。この二点を念頭に、玉川大学では二〇〇五(平成一七)年度より「一年次セミナー101(二単位)」、「一年次セミナー102(二単位)」を全学部必修科目として開講した。

(二) 「一年次セミナー」の到達目標と二つのスキル

玉川大学の初年次教育プログラムでは、学生指導の一環として「一年次セミナー101/102」の授業を担当する教員に、学生が自分自身をきちんと見つめ、自分の人生を多様な観点から考え、個人として意思決定を行うことができる

ようになる。手助けをするように要請している。学生は、学問や社会的活動に対して自分が「行いたいこと」と「行わなければならないこと」を発見することによって、大学生として、また、社会人として自覚をもつことができる。

「いま行わなければならないことに気づくこと」と「大学生、社会人としての自覚をもつこと」は相互に影響し合い、学生が学問や社会活動に持続的に取り組むうえでの活力となる。最近は大學生になっても個人としてのアイデンティティが確立されない者が多くなったといわれている。それゆえに、大学教育の早い時期に自分と自分の人生について考える機会を用意すると同時に、大学での学習と生活が高校までとは異なることを知らせる必要がある。こうしたことをふまえ、玉川大学の初年次教育プログラムでは以下の四

- ① 学問の重要性を理解し、規則正しく計画的に学習する習慣を身につけることができる。
- ② 大学で学ぶうえでの基本的なアカデミックスキルを身につけることができる。
- ③ 卒業までの学習見通しと卒業後の将来設計を立てることができ、卒業までの学習見通しと卒業後の将来設計を立てることができ。
- ④ 大人として健全な生活習慣を身につけることができる。

さらに、これらの到達目標を達成させるためにプログラムの内容を「アカデミックスキルズ（大学の学習への積極的な適応と同化、学習に対するモチベーションの向上、大学生としての基本的な読解力・文章力・コミュニケーション能力の養成）」、「スチューデントスキルズ（大人としての自由と責任についての学習）」、「ソーシャルスキルズ（大学四年間の学習戦略と将来のキャリア設計の策定）」の三つに分類している。

(三) 学生中心の授業—学生が考え、発言する授業

「一年次セミナー」においてなによりも重要なのは授業の進め方である。それは、従来行ってきたような、教員が学生に講義をするという一方的な授業では本来の目的が達成できないからである。教育効果をあげるためには各教員の努力と工夫が要求される。この授業では答えがひとつではないものがほとんどであり、そのためにも、教室は学生たち自由に発想させ、発言させる場ではなくてはならない。学生は自発的に予習をし、開かれた討論のなかで自分の考えを述べるのが要求される。また、教員や友人の意見を聞き、自分の考えと比較することも求められる。こうした学習をとおして自他を意識し、自分とはなにかが明瞭にな

り、アイデンティティが確立され、人間的な成長が促されていく。したがって、授業は学生に考えさせ、発信させると同時に、他者の意見に耳を傾けることを念頭においた双方向的なものでなくてはならない。しかし、この手法に戸惑う教員が少なくないことも事実であり、その対策として、玉川大学では「授業改善のためのワークショップ」および「授業方法研究会」を定期的に開催している。また、各授業項目の教授法マニュアルを用意し、希望する教員には配布している。

(四) 組織的な「一年次セミナー」の教育サイクル

「一年次セミナー101」「一年次セミナー102」はそれぞれ春学期と秋学期に開講し、原則として、一クラス三〇名ほどの人数で実施している。玉川大学は二〇〇〇名ほどの一年生をかかえているため、担当教員は六〇〜七〇名に及ぶ。そうした事情もあり、「一年次セミナー」を安定運営すると同時に、その持続的改善を果たすために、玉川大学では「初年次教育プロジェクト会議」を設置している。会議は学士課程教育センター（二〇〇八年度まではコア・EYE教育センター）所属教員と各学部の初年次教育プロジェクト・リーダーにより構成されている。「初年次教育プロジ

エクト会議」は新年度に向けての初年次教育の年次プランニングの策定（基本シラバスの作成、教員研修会の計画等）と授業改善検討会の実施がその主たる業務であるが、それらに加えて、月例会議を開催し、各学部の「一年次セミナー」が適正に運用されているかどうかを定期的に確認している。また、夏期休暇期間および春期休暇期間を中心とした初年次教育研究会の開催等も行っている。なお、こうした取り組みはプロジェクト・リーダーをとおして各学部の教授会、学科会に報告され、必要に応じて審議される全学的な体制をとっている。

(五) 初年次教育とFDの連動—FDの端緒としての初年次教育

こうした玉川大学の初年次教育の取り組みは学生からも評価され、「自分の大学生としての責任を自覚することができた（六七％）」「授業をとおして友人との交流を深めることができた。また、友人から受けた刺激により自分自身が向上したと思う（六七・七％）」『「一年次セミナー」を履修したことで、学生生活をより意義のあるものにする事ができると思う（五八・五％）」等の結果となって表れている（二〇〇七年度に実施した学生アンケートから）。

一方、教員側においても初年次教育の実施、展開をとおして教育改善に対する意識変革が促進されつつある。玉川大学は、大学設立当初から担任制を採用し、「一年次セミナー」実施前まで「担任ゼミナール」の名称で教養ゼミナールを展開してきた。「一年次ゼミナール」は「担任ゼミナール」を根本から見直し、再編成したものである。「一年次ゼミナール」の実施にあたり、各学部長および「担任ゼミナール」担当の全教員と時間をかけて意見交換を行い、さらに、実施に向けての審議を重ねたことで、大学ユニバーサル化時代における教員間の危機意識の共有がある程度図られた。それまでも、ほとんどの教員たちが授業等をとおして学生の変化を感じてはいた。同時に、多くの教員たちが旧来の授業および授業システムでは立ち行かないとも感じていた。「一年次ゼミナール」の実施は、そうした教育上の悩みをかかえる教員たちが協働して教育を変えていく端緒となった。

また、「一年次ゼミナール」の安定運営に向けて定期的に開催している授業改善のためのワークショップや授業方法研究会は、教員にミクロレベルのFD効果をもたらした。こうした取り組みはもともと「一年次ゼミナール」をよりよく展開するために用意されたものであったが、参加した教

員たちのなかには、その成果を自らが担当するコア科目や専門科目に応用する者が出てきた。具体的には、「一年次セミナー」で活用を促した毎回の授業計画表（タイムテーブル）を専門科目等に導入する教員や、「一年次セミナー」のアクティブ・ラーニングの手法を同じく導入する教員が増えはじめた。こうした教育技法を他科目でも活用することで、大学の授業は確実に改善されていく。加えて、教育評価の高い教員が行う事例報告会に参加することで、自らの授業手法を再確認する機会を得るメリットも生まれた。学士課程教育センターでは、現在こうしたワークシヨップおよび研究会を年一〇回ほどのペースで開催している。ほぼ一日を費やすものから、授業終了後の二時間ほどを活用した短時間のものまで研修の時間と形態はさまざまであるが、最近では「一年次セミナー」を担当していない教員の参加も増えてきている。そもそもは「一年次セミナー」の実施によってはじまったこうしたFDの取り組みが、学部や科目の壁を越えていまや全学的な広がりになりつつある。

二．玉川大学の二年次教育―「二年次セミナー201/202」を中心として

（一）「二年次セミナー201/202」の開講

玉川大学では二〇〇九年四月より既存の全学コア科目「学生と大学」「学生と社会生活」の二科目を用いて「二年次セミナー201/202」を開始した。具体的には、春学期に複数開講されている「学生と大学」の二クラス分を「二年次セミナー201」として、同様に、秋学期の「学生と社会生活」二クラス分を「二年次セミナー202」として用意した。現在開講中の「学生と大学・二年次セミナー201（以下、二年次セミナー201）」は三クラスで計二二〇名ほどの学生が履修している。「学生と社会生活・二年次セミナー202（以下、二年次セミナー202）」は秋学期に開講される。なお、実施にあたっては適正人数で授業を運営する必要があることから、履修人数制限を行っている。

（二）二年次のスランプ

玉川大学では二〇〇八年度に、在校生、保護者、教職員、卒業生、企業を対象に『玉川大学の現状と将来像に関する調査二〇〇八』を実施した。その際に、在学生に対して大學生活全般の充実度について質問したところ、「学業の充実度」および「学内のクラブ・サークル活動の充実度」と

もに、一年生よりも二年生のほうが低下する現象が見られた。学業にかんじていえば、一年生の一八・三％が「充実している」、四五・六％が「やや充実している」と答えているのに対し、二年生はそれぞれ一七・四％、四四・九％と低下している。学内のクラブ・サークル活動についても、一年生の四四・三％が「充実している」「やや充実している」と返答しているのに対し、二年生は四一・九％と数字を下げている。また、上記とは別の調査ではあるが、経営学部で行った二〇〇七年度のアンケートの同項目と比較すると、二〇〇八年度の経営学部二年生は一年生のときよりも学業の充実度が低下している現象が見られた。

こうしたデータの裏付けを得るためにコア・コア教育センター（現在は学士課程教育センターに業務が引き継がれている）では、全学部の二年生三〇名を対象にインタビュー調査を行った。その結果、「専攻分野を変えたい」「専攻分野の科目が面白くない」「自分の専攻分野とキャリアの方向性が結びつかない」「相変わらずレポートがうまく書けない」「自分の将来について親の考え（理想）と自分の考え（理想）が異なる」などの返答が寄せられた。アメリカ合衆国で、いわゆる二年次のスランプ（Sophomore Slump）と呼ばれる現象が、

はからずも玉川大学でも起きていることが明らかにされた次第である。実際のところ、こうした現象は以前から教員が授業をとおして感じていたことでもあった。二年次のスランプは、一種の中だるみ現象であるといってしまうまでもだが、大学に慣れるにしたがつて、大学生活へのモチベーションの低下や、自分の専攻領域と将来を結び付けることへの不安が出てくるのであれば、それを解消するための方策が必要になる。

玉川大学では、二年次のスランプを単に学生個人の資質や意識の問題としてはとらえず、教育システムの不備にも原因があるのではないかと分析した。一年生のときには、「一年次セミナー」を中心にコア・コアコンセプトのもと、教職員は常に学生と向かい合う姿勢を明確にしてきたが、二年生に対しては学生たちの自覚と責任に委ねる部分があった。筆者の経験からも、二年生と話をすると、成績のよい学生であっても自分の立ち位置がはつきりとかかめていないと感じることがよくあった。現在学んでいることが、社会全体、あるいは自分の専攻領域のなかでどのよう位置づけられているかを、学生たちは理解できていないのではないかと思うことも多かった。そこで、こうした状況を改善する方策として「二年次セミナー」の設置を計画した。

三年生になれば各学部で専攻領域のゼミナールが始まる。ゼミナールが始まれば、専攻領域の学習の方向性も定まるので、「二年次ゼミナール」にはその橋渡しとしての役割ももたせるようにした。

(三)「二年次ゼミナール」でなにを学ぶか

「一年次ゼミナール」は所属学部の教員が所属学部の学生を担当する授業形態をとっているが、「二年次ゼミナール」は学部混成方式で運営されている。授業のなかで、いわゆる文系・理系の壁、もしくは他の学問領域の壁が存在したとしても、あえて学生にそれを意識させ、自らの力で乗り越える方針をとっている。授業担当教員は学生の学習環境を整えるファシリテーターの立場である。

「二年次ゼミナール201」では、スーパー・アカデミックスキルズと称して「一年次ゼミナール101」で学んだアカデミックスキルズをさらに磨きあげると同時に、「なぜそうしたスキルが必要なのか」ということを、専攻領域の学問と関連づけて考えさせる。また、「社会に出るにあたり大学で最低限どのような能力を身につける必要があるのか」、そのためには「自分は専攻領域とその他の学問領域にどのような向かい合えばよいのか」「どうすれば生涯継続する

学習習慣を身につけることができるか」等のテーマについて議論させる。具体的には、先の「スーパー・アカデミックスキルズ」に加えて、「専攻領域マップの作成」「(自分の)専攻領域の可能性と限界」「複合学問領域について」「インターンシップの意義と役割」「海外で学ぶことの意義」「サービス・ラーニングの意義と役割」「大学の学習と地域社会参加」について学ばせている。「二年次ゼミナール201」では、こうした内容を自分の問題として考察させることで、自分の専攻領域とそれにかかわる学生個々人の社会における役割を明確に認識させることを目標としている。

「二年次ゼミナール202」は「一年次ゼミナール102」のキャリア教育としての側面をさらに発展させたものである。この科目では、「社会人としてどう生きるか」「自分のキャリア形成についてどのように考えるか」「大学卒業後にどのような道に進むか」などをテーマとしているが、実際には、こうしたテーマをさらに深め、「自分はそもそもなにを望んでいるのか」ということを、より広い社会生活(仕事・恋愛・結婚・市民生活など)の文脈に立脚して考えさせるのが目的である。その際に、自己管理能力、セルフエスティーム、倫理観、他者との協働等を視野に入れて学ばせることとはいうまでもない。具体的には、「世界観の確立」「価値

と価値観」「価値観の探求と生きかたのスタイル」「キャリアの探求と社会貢献」「女性と男性・男性と女性」「恋愛と結婚」「夫婦の関係と親子の関係」「市民としての責任」などについて、学生それぞれが自分の意見を確立することを期待している。「二年次セミナー2021」では、キャリアの探求は、たんに好きな仕事を見つけないということではなく、広く自分が生きている社会全体を視野に入れて考えなければならぬ問題であるということ、学生に認識させ、同時に、自分の内面世界と向かい合うことでもあるということ、を理解してもらうことをめざしている。

これまで見てきたように玉川大学では「一年次セミナー101/102」を中心に、大学教育の早い段階で高校生から大学生への展開を図ることをめざしている。そのうえで、学生一人ひとりにアイデンティティを確立させ、二一世紀社会で生きていくうえの基盤を形成させるように努めている。さらに、そうした取り組みにとどまらず、学生が初年次の段階で得られた学習生活上の効力感を、二年次以降の大学生活のなかで持続させ、新たな学習への取組みにつなげられるように、「二年次セミナー201/202」をナビゲーター役として用意している。玉川大学では、こうしたステッ

プの確実な積み重ねこそが学士課程教育を構築するうえで重要なポイントになると考えている。